

第1学年 国語科学習指導案

書式は学校の指定に合わせて調整してお使いください。

日 時 令和 年 月 日 () 第 校時
場 所
指導者

1 単元名

「ぶんをつくろう」 教材名「ぶんをつくろう」

2 単元の目標

文の中における主語と述語との関係に気づくことができる。（〔知識及び技能〕(1)力）

語と語との続き方に注意することができる。（B(1)ウ）

だれが・何が、どうするかを組み合わせ、意味の通る文を書く学習の中で、言葉への関心をもち、自分の取り組みを見直そうとする。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①文の中における主語と述語との関係に気付いている。（〔知識及び技能〕(1)力）	①「書くこと」において、語と語との続き方に注意している。（B(1)ウ）	①だれが・何が、どうするかを組み合わせ、意味の通る文を書く学習に進んで取り組み、友達の反応や自分の記録を確かめながら、言葉の使い方や捉え方を見直そうとしている。

4 指導上の考察

（1）単元について

だれが・何が、どうするかを組み合わせ、意味の通る文を書く。この教材では、主語と述語を結んだ文と、対応を直した自分の短い文章を残し、言葉をどう使ったか、どう捉えたかが分かるようにする。

（2）児童について

（学級の子どもの様子を先生が書く）

（3）指導について

独自例「ねこが はしる」と「ねこは しろい」を使い、主語と述語を線で結ぶ。自分の文からまず「どうした」を探し、その動作をしたものを確かめる。想定する難しさは、主語と述語を遠くに離して別の人の行動につなぐ、述語を省いたまま文末にする。評価では、語と語との続き方に注意しているかを、主語と述語を結んだ文と、対応を直した自分の短い文章と活動中の発言・操作から確かめる。作品の量や見た目、発言の回数だけで判断しない。

5 指導と評価の計画（全4時間）

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1	○誰に何を伝えるかを確かめ、書く材料や最初の文を出す。 短い文のだれとどうするを結ぶ。	学習状況を見て支援する。
第2次	2～3 （本 時）	○短い文のだれとどうするを結ぶ。組合せが合わない文を比較する。自分の文を直す。直した理由を説明する。	思①（発言・活動中の記録・作成物）
第3次	4	○読み手が受け取った意味を確かめ、自分の意図と違った箇所を選んで直す。残した表現にも理由をもつ。学習前後の記録を比べて、確かめたことをまとめる。	態①（学習前後の記録と見直しの理由）



6 本時の指導 (2/4)

(1) 本時の目標

語と語との続き方に注意することができる。(B(1)ウ)

(2) 学習過程

段階	学習活動 (○主な発問) ・ 予想される児童の反応	指導上の留意点 (◎評価)
導入 (分)	誰に何を伝えるかを確認め、書く材料や最初の文を出す。 ○「だれがしたことか、文の終わりまで同じ相手に伝わり ますか」 【めあて】だれが・何が、どうするかを組み合わせ、 意味の通る文を書く。 〈予想される児童の反応〉 ・ 動いているのは小鳥だから、「小鳥が鳴く」とつなが る。	最初の言い方や記録を残し、授業後の考 えと比べられるようにする。正答を先に 示さず、扱う言葉と課題を確認する。
展開 (分)	○「だれがしたことか、文の終わりまで同じ相手に伝わり ますか」 短い文のどれとどうするを結ぶ。組合せが合わない文を比 較する。自分の文を直す。直した理由を説明する。 読み手が受け取った意味を確認め、自分の意図と違った箇 所を選んで直す。残した表現にも理由をもつ。 〈予想される児童の反応〉 ・ 動いているのは小鳥だから、「小鳥が鳴く」とつなが る。 ・ 「ぼくは」の後に妹の動きが続いていて、変だと思う。 ・ 文を分けると分かりやすい。	独自例「ねこが はしる」と「ねこは し ろい」を使い、主語と述語を線で結ぶ。 自分の文からまず「どうした」を探し、 その動作をしたものを確かめる。 想定する難しさ：主語と述語を遠くに離 して別の人の行動につなぐ、述語を省い たまま文末にする。 評価では、語と語との続き方に注意して いるかを、主語と述語を結んだ文と、対 応を直した自分の短い文章と活動中の発 言・操作から確かめる。作品の量や見た 目、発言の回数だけで判断しない。 ◎思① 語と語との続き方に注意してい る。(発言・活動中の記録・作成物)
まとめ (分)	【まとめ】問いへの答えを、今日確かめた言葉や表現を 含めて話す。 主語と述語を結んだ文と、対応を直した自分の短い文章を 見返し、初めと変わった点や、そのまま残した理由を確か める。 〈予想される児童の反応〉 ・ 文を分けると分かりやすい。	教師のまとめを写すだけにせず、本人が 選んだ言葉と理由を確かめる。態度は本 時だけで決めず、単元を通した取り組み と調整の記録を合わせて判断する。 ◎態① (最初と最後の記録、見直しの理 由)

(3) 板書計画（縦書き・右から左へ）

縦書きで、右から左へ学習の流れを配置する。右端に題名とめあて、その左に問い「だれがしたことか、文の終わりまで同じ相手に伝わりますか」。中央は、主語と述語を結んだ文と、対応を直した自分の短い文章に必要な言葉・材料と、考えた理由を対応させる。本文を扱う場合は先生が手元の教科書から必要な範囲を示す。左側に比べて気付いた点と見直した箇所、左端に本時で確かめたことを置く。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」 (@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

